

# 興行分析 8月度レポート

◆————◆  
< 2011年9月9日 >

7月公開の大作・話題作が市場牽引するも、  
新作が振るわず

KRI 

キネマ旬報映画総合研究所

## 興行分析 8月度レポート

### 【前年同月比で興収80.1%、動員78.2%。前月とほぼ同水準に】

8月の興行は、前月に封切られた「ハリー・ポッターと死の秘宝 PART2」(ワーナー/15日)、「コクリコ坂から」(東宝/16日)、「トランスフォーマー/ダークサイド・ムーン」(パラマウント/29日)などの夏休み大作映画が引き続き市場を牽引したが、東京ロードショー劇場78館の集計では、総動員数が82万3707人、総興収が11億4133万円と、前年同月(81館)比で動員数78.2%、興収80.1%と前月の水準がほぼそのままに推移した。興収を前年比で追うと、上半期(1～6月合計)集計で82.2%→7月度が76.5%→8月度が80.1%となり、依然、回復の目処が立たぬまま下半期最初の2ヵ月が過ぎた。

### 【「こちら葛飾区亀有公園前派出所～」は初日2日間で興収1億円届かず】

8月の主な公開作では、1週目の週末に「仮面ライダーオーズ～/海賊戦隊ゴーカイジャー」(東映)の2本立てと「こちら葛飾区亀有公園前派出所 THE MOVIE 勝どき橋を封鎖せよ!」(松竹)が登場。前者は、487スクリーンで公開し、初日2日間で動員29万3147人、興収3億4956万円をあげた。これは同シリーズの昨年対比で、2D版では182%となり好成績といえる。2Dは298スクリーンで興収2億8809万円、3Dは189スクリーンで興収6146万円であり、この種のファミリー映画では2Dが圧倒的に強いことを証明した。一方、後者は277スクリーンで公開し、動員数8万3146人、興収9868万円と振るわず。競合となる7月封切りの夏休み大作がいかに強力とはいえ、大変厳しいスタートとなった。

お盆休みにかかった2週目の週末には、カンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞した「ツリー・オブ・ライフ」(ディズニー)が登場。作家性の強いテレンス・マリックの監督作ながら、ブラッド・ピット、ショーン・ペンという役者の引きにカンヌでの話題性が相俟って、224スクリーンの拡大公開に。結果、初日3日間で動員11万5776人、興収1億4161万円とまずまずのスタートをきったが、2週目以降の落ちが大きい。昨年1月に公開されたテリー・ギリアム監督、豪華スター競演の「Dr.パルナサスの鏡」(ショウゲート)を例に取ると、233スクリーン公開で、初日2日間で動員9万8000人、興収1億3000万円、最終興収7億円という成績。これを超えてどこまで興収を伸ばせるかに注目したい。

### 【「うさぎドロップ」が110スクリーン公開ながら、初日2日間で興収1億円超え】

3週目には、「カンフー・パンダ2」(パラマウント)、「シャンハイ」(ギャガ)、「うさぎドロップ」(ショウゲート)の3本が、新作として週末ランキングトップ10に顔を出した。「カンフー・パンダ2」は535スクリーンで公開し、初日3日間で動員20万9802人、興収2億7437万円の好スタート。前作は、2008年7月26日にアスミック=角川配給にて533スクリーンで公開し、興収20億円の大ヒット。年間興収ランキングでも28位(洋邦合わせ)の好成績を収めたが、実は、日本以外の世界各国では年間を通じてトップクラスの実績であり、20億円クラスの着地では本国スタジオの意向には沿わない。ただし、現在の日本市場では、前作並みの最終興収となれば、十分な成績といえるだろう。米中合作で、渡辺謙、菊地凜子など日本人キャストも起用した「シャンハイ」も、204スクリーンで公開され、初日2日間で動員8万8421人、興収1億311万円と滑り出しは好調。豪華キャストだけに300スクリーン以上の公開も考えられたが、敢えて劇場数を絞り、宣伝費を

抑えた堅実な興行を展開している。「うさぎドロップ」(ショウゲート)は110スクリーンながら、初日2日間で動員7万8865人、興収1億超をあげる絶好のスタート。前述した「シャンハイ」の約半数のスクリーンで興収はほぼ同等という効率の良さで、スクリーン・アベレージも90万円と高い。原作漫画の人気に加え、アニメ版がフジテレビ深夜“ノイタミナ”枠で評判となり、これに芦田愛菜出演がバラエティ番組での露出を呼ぶなど、ショウゲートとしては久しぶりのクリーン・ヒットとなった。

#### 【「神様のカルテ」が順調なスタート。「日輪の遺産」は国民の心情に馴染まず! ?】

そして、8月最終週には、嵐の櫻井翔主演作「神様のカルテ」が321スクリーンで公開。初日2日間で動員12万9522人、興収3億285万円をあげ、実写邦画では久しぶりの好スタートとなった。昨夏(8月21日)の「ハナミズキ」(東宝)が310スクリーンで公開され、初日2日間で動員約30万人、興収4億円、最終興収28億3000万円とあり、本作の20億円超えに期待が集まる。また、最終週には「日輪の遺産」も登場。浅田次郎原作、8月の戦争映画、堺雅人主演などヒット要素も多く堅い興行が期待されたが、結果、145スクリーンで、初日2日間で動員3万7062人、興収4422万円、週末ランキングでは初登場ながら総合11位のスタート。今年2月12日に公開された「太平洋の奇跡—フォックスと呼ばれた男—」(東宝)の300スクリーン、初日2日間で動員21万6495人、3億9044万円と比べ、公開規模が半分以下とはいえ厳しい成績である。パブリシティ露出はそれなりにあったが、内容が伝わりにくかったことが主要因か。“マッカーサーの財宝を秘匿せよ”という設定自体に、多くの日本人が戦争映画に求めるものとの違和感があったといえ、身も蓋もないだろうが、震災以降の国民の心情に馴染まなかったことは確かだろう。

#### 【「ハリー・ポッター〜」90億円突破などヒット大作の勢いを9月に繋げたい】

新作にヒット作が乏しい結果、冒頭でも触れた通り、8月の興行は、7月封切りの大作に頼るところが大きかった。「ハリー・ポッターと死の秘宝 PART2」は、8月末時点で90億円に到達し、「パイレーツ・オブ・カリビアン 生命の泉」を超えて、今年No.1のヒット作に。また「トランスフォーマー／ダークサイド・ムーン」も第1作の最終興収40億1000万円がほぼ見えてきた。そして近年のジブリ映画の実績には及ばないものの「コクリコ坂から」も40億円を突破するなど、夏休み興行を賑わせた。

9月には、震災の影響で公開時期を仕切りなおしたSFアクション大作「世界侵略：ロサンゼルス決戦」をはじめ、前作が興収27億円超の「アンフェア the answer」、テレビドラマでカルト的な人気を博した「モテキ」と「セカンドバージン」、「アース」「オーシャンズ」超えを狙うネイチャー・ドキュメンタリー「ライフ」など、大作・話題作が公開となる。是非、8月までのダウントレンドを覆すヒットの連鎖に期待したい。